

胸部心臓血管外科この1年

胸部心臓血管外科医長 吉田博希

はじめに

平成11年4月1日からは当科の名称が第2外科から胸部心臓血管外科に改称となりました。それまでの第2外科という名称では診療内容が解らず、ご不便をおかけしておりましたが、それも解消されました。少し長くて言いにくいのが難点ですが、診療内容を解りやすくするため、この名称にしました。また、病棟は病院増改築部に新設された2階西病棟に移転し、20床を有し、医師数も3人から4人に増員となり、充実した診療を行うことができるようになりました。

診療スタッフ

胸部心臓血管外科スタッフは和泉裕一（診療部長）、吉田博希（医長）に加え、平成11年3月31日までは長谷川聡（旭川医大19期）が在職し、平成11年4月1日より、眞岸克明（旭川医大14期）ならびに石川訓行（旭川医大19期）が赴任し待望の4人体制となりました。眞岸先生は温厚でいつも笑顔を絶やさず、患者さんやスタッフにやさしく接してくれます。また、今年の病院忘年会では飛び入りでステージに上がり司会をこなし、一躍有名人になるなど多方面で才能を発揮してくれています。石川先生は驚異的な体力の持ち主で連日泊まり込みで術後管理を行っても疲れをみせず、頑張ってくれています。また、大変几帳面でカルテやレントゲンフィルムの整理整頓をきちんとしてくれ、レントゲンフィルム袋はいつもあいうえお順に並べてあります。

診 療

胸部心臓血管外科外来では平成9年9月1日より再診患者さんの予約制を導入しましたが、新患、再診の2診体制としたため、比較的時間に診療できるようになりました。また、患者さんも種

内など遠方から受診される方もたくさんいますが、時間通りに来院していただき、都合が悪い時には電話連絡をしてくれるなど、順調に機能しています。入院ベッド数が増えたため、症例数も増え、平成11年の手術例数は236例と、過去最高の年間手術数となりました。本邦の動脈硬化、肺癌患者数は増加傾向にありますので、今後も症例数は増加していくものと思われます。当科の特色として、侵襲の大きな手術が多いため、在院日数が長くなるのが問題ですが、最近は人工心臓を使わない心拍動下の冠動脈バイパス手術、ステントグラフトによる胸部大動脈瘤手術、血管狭窄病変に対するバルーン拡張術、ステント留置手術、胸腔鏡を使った手術など低侵襲の手術術式を積極的に導入し、在院日数を少なくする様努力しております。また、これらの低侵襲手術は術後の回復も早く、患者さんの満足度も高いと思われ、今後も積極的に行っていく方針です。以下に平成11年の手術症例を示します。

手術症例

| | |
|------------|------|
| 1. 心、大血管疾患 | 35例 |
| 冠動脈疾患 | 21例 |
| 弁疾患 | 4例 |
| 胸部大動脈疾患 | 10例 |
| 2. 末梢血管疾患 | 132例 |
| 腹部大動脈瘤 | 13例 |
| 末梢動脈疾患 | 57例 |
| 下肢静脈瘤 | 46例 |
| 透析用内シャント | 13例 |
| 静脈再建 | 3例 |
| 3. 胸部、肺疾患 | 30例 |
| 肺 癌 | 11例 |
| 気 胸 | 5例 |
| 肺アスペルギルス症 | 2例 |

| | |
|--------|------|
| 肺膿瘍、膿胸 | 7例 |
| 気管支拡張症 | 1例 |
| 縦隔 | 2例 |
| 胸壁腫瘍 | 1例 |
| 多汗症 | 1例 |
| 4. その他 | 42例 |
| 総数 | 236例 |

各疾患の内訳

1. 心・大血管疾患 35例

1) 冠動脈疾患：21例（うち緊急手術が8例）

3枝バイパス 3

2枝バイパス 11

1枝バイパス 7 (MIDCAB:1, OPCAB:3)

（1例は上行大動脈置換、1例は頸動脈血栓内膜摘除、大動脈弁置換との同時手術）

低侵襲手術をめざし、人工心肺を使わない心拍動下手術を積極的に導入しており、昨年は1枝バイパスの約60%に拍動下手術を行いました。

2) 弁疾患：4例

僧帽弁置換術 2

大動脈弁置換術 1 (CABG、CEA同時手術例)

僧帽弁形成、Maze 1

3) 胸部大動脈疾患：10例

急性大動脈解離 2

上行置換 1

上行弓部置換 1

慢性大動脈解離 2

上行置換 1

上行弓部置換 1

胸部大動脈瘤 5

上行置換 2

ステントグラフト 3

腕頭、鎖骨下動脈狭窄 1

上行-腕頭、鎖骨下動脈バイパス 1

胸部大動脈瘤3例にステントグラフト内挿術を行いました。特に胸部大動脈瘤においては手術侵襲を軽減でき、非常に有用な方法と考えております。

2. 末梢血管疾患 132例

1) 腹部大動脈瘤：13例（うち破裂例3例）

2) 末梢動脈疾患：57例

①閉塞性動脈硬化症 (ASO) 49

大動脈-大腿動脈バイパス 9

腸骨-大腿動脈バイパス 4

腋窩-大腿動脈バイパス 4

大腿-大腿動脈バイパス 5

大腿-膝上膝窩動脈バイパス 7

大腿-膝下膝窩動脈バイパス 5

脛骨・腓骨動脈バイパス 6

腸骨動脈 PTA、ステント

revision 手術 14

その他 3

(一部重複あり)

②閉塞性血栓性血管炎 (TAO) 1

大腿-大腿-腓骨動脈バイパス 1

③急性動脈閉塞 4 (血栓摘除)

④大腿動脈瘤 3

⑤外傷 1 (膝窩動脈置換術)

⑥頸動脈、椎骨動脈 4

CEA 3

椎骨動脈、鎖骨下動脈再吻合 1

腸骨動脈の限局性狭窄に対してはバルーン拡張術、ステント留置などで侵襲の軽減をはかりました。

3) 下肢静脈瘤：46例

4) 内シャント：13例

5) 静脈再建：3例

シャント側の鎖骨下静脈、腕頭静脈閉塞例に対し、静脈再建を行いました。腋窩-腋窩静脈バイパス、外頸-腋窩静脈吻合術、PTAを行いました。

3. 胸部・肺疾患 30例

1) 肺癌 11例

(肺葉切除4、全摘4、管状切除1、プローベ1、胸腔鏡下生検1)

2) 気胸 5例

(胸腔鏡手術4)

3) 肺アスペルギルス症 2例

(全摘1、肺葉切除1)

4) 気管支拡張症 1例 (肺葉切除1)

5) 肺膿瘍、膿胸 7例

6) 縦隔 2例

7) 胸壁腫瘍 1例

(胸腔鏡下摘出術)

8) 多汗症 1例

(胸腔鏡下胸部交感神経節切除)

肺癌は進行例が多く、管状切除を1例に行い機能温存をはかりましたが、4例は全摘せざるをえませんでした。

4. その他 41例

ベースメーカー、気管切開、植皮、イレウス、
肢趾切断術、リンパ節プローベなど

論文、学会活動

論文発表4篇、学会、研究会、講演会における

発表が23件ありました。このうち全国規模の学会、研究会における発表が7件ありました。症例数も増加し、観察期間も長くなってきたので、ますます内容の濃い発表が行えると思いますので、今後とも忙しい臨床の合間をぬって、成績をまとめていきたいと思います。

おわりに

ハード、ソフトともに充実しつつあり、この地域の基幹病院としてますます機能を発揮できるものと思いますので、今後ともよろしく願い申し上げます。

整形外科この一年

整形外科医長 高橋宏明

人事移動

平成11年は、高橋宏明、近藤英司、奥泉知郎、沢口直弘の4名で3月まで診療を行って参りました。また4月より、近藤が国立札幌南病院、奥泉が札幌厚生病院、沢口が苫小牧市立病院へ転出し、新たに北海道整形外科記念病院から三上将、美唄労災病院から室田栄宏を迎え、1名減の3名のスタッフで診療を始めました。戦力低下でかなり苦しいスタートとなりましたが、幸いにも7月より3ヵ月交代で北大より1年目ドクターが派遣されることとなり、西池修、内田淳の2名が活躍しました。

診療状況

外来は今年も従来通り予約制、午前のみで行っています。月火水金を2診体制、木曜のみ1診体制でしたが、スタッフの減少に伴い、4月より火

曜日も1診体制となりました。予約診療枠の減少にも関わらず、1日平均外来数も150名前後で昨年と比べさほど変わりません。入院は5階西病棟が1床増え、49床で対応しております。年間入院数は前年同様で、限られたベッドを有効に活用するため、平均在院日数の短縮に努めております。

手術数及びその内容について

年間手術数は553例で前年比108%でした。スタッフの減少にも関わらず年々症例は増えていきます。内訳は外傷が273例で全体の約50%で昨年に比べ、変性疾患・その他疾患の増加により、その比重はさらに減少しています。四肢外傷のうち3分の1が上肢、3分の2が下肢で、大腿骨頸部骨折(64例)に代表される高齢者の下肢骨折が昨年に比べて20%程度増加しています。昨年も述べましたが、地域人口の高齢化が進む中、在宅老人